論敵の議論に答えるところからであって[13]、決して理論的関心からではない。このようにみてくると、ウェーバーのように、予定説を恩恵の選びの教理としてではなく、滅びの予定に重点をおいた二重予定説として概念構成するのは、キリスト教の主流からみても、カルヴァンの立場からみても、適切とは言えないだろう。

五

次に予定説のもたらす心理的影響という問題を考察しよう。ウェーバーは印象的な言葉で次のように述べている。

「この悲愴な非人間性をおびる教説が、その壮大な帰結に身をゆだねた世代の心に与えずにはおかなかった結果は、何よりもまず、個々人のかつてみない内面的孤独化の感情だった。宗教改革時代の人々にとっては人生の決定的なことがらだった永遠の至福という問題について、人間は永遠の昔から定められている運命に向かって孤独の道を辿らねばならなくなったのだ。誰も彼を助けることはできない。牧師も助けえない、……聖礼典も助けえない、……また教会も助けえない、……最後に、神さえも助けえない」(156〜157頁)。

二重予定説が当時の人々に与えた心理的結果をウェーバーはかつてみない内面的孤独化の感情ととらえ、そこに古代ユダヤの預言者から始まった「呪術からの解放」(Entzauberung) の過程の完結をみている。二重予定説と呪術からの解放を結びつける論理は、「神が拒否しようと定め給うた者に神の恩恵を与えうるような呪術的な方法など存在しないばかりか、およそどんな方法も存在しない」(157頁) というところから、「教会や聖礼典による救済を完全に廃棄した」(同上) という結果が生じたというのである。

しかしこのような、二重予定説→内面的孤独化→呪術からの解放という論理はわれわれを納得させるものだろうか。まず、ウェーバーの提示する二重予定説はけっきょく決定論的なものであるが、前述のとおり、予定説を恵みの選びとして、救いにおける神の自由な恵みの主権性の告白として、受け取るならば、そこから生じる心理的結果は違ったものだったと思われる。内面的孤独化の感情というようなものではなく、神への信頼と感謝と喜びが生じたのではないだろうか。次に、呪術からの解放は、神さえも助けえないという決定論の内面的孤独化の感情から導き出すことができるだろうか。それは、古代ユダヤの預言者以来の、神のみを神とする被造物神化の拒否につながるもので、予定説とは直接結びつくものではない。呪術からの解放—被造物神化の拒否—はカルヴィニズムよりは、むしろ予定説を否定する再洗礼派の方に強く現れているとウェーバーがみている[14]ことも、このことを裏付けるものではなかろうか。

ウェーバーはさらに二重予定説から生じる内面的孤独化の社会心理的結果について次のように述べている。

「こうした人間の内面的孤独化は、……一面で、文化と信仰における感覚的・感情的な要素へのピュウリタニズムの絶対否定的な立場……の、さらに、彼らのあらゆる感覚的文化への原理的な嫌悪の根拠を包含することになる。が、また他面では、この内面的孤独化は、今日でもなおピュウリタニズムの歴史をもつ諸国民の『国民性』と制度の中に生きているあの現実的で悲観的な色彩をおびた個人主義……の一つの根基をも形づくっている」(157〜58頁)。

興味深い説明であるが、この文章の主語は、「内面的孤独化」ではなくて、「呪術からの解放」とした方が合理的ではないだろうか。

ともあれ、ここでウェーバーが次に取り組む問題は、カルヴィニズムの予定説から生まれる内面的孤独化と、「社会的組織づくりの点でカルヴィニズムが明らかに卓越していた事実」とが「どの

「選びと遺棄は一つのものの両面のように結び合っている。遺棄された事実があることが選ばれたことの確認になる。……ポジティヴに言われたことをネガティヴにいうことによってたしかにするのは通例である。言うべきことの実質は言ったのだから、嫌われることは言わないのが良いではないかと考える人があるかも知れない。それは無責任であるし、確認抜きで言いっぱなしにしたのと同じである」。渡辺信夫『カルヴァンの「キリスト教綱要」について』、神戸改革派神学校、1998年、130〜31頁。

13) たとえば、『キリスト教綱要』Ⅲ, 23 など。

14) 安藤英治、前掲書、322〜323頁。